
夢で逢いましょう

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢で逢いましょう

【コード】

N2207K

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

自分の心に気づいた彼は、彼女に求婚した。しかし彼女は…。

また、夢を見た。

これで何回目だろう。女の夢を見るなんて、思春期真っ只中のとき以来だ。

彼女とは、いわゆる幼馴染み。

物心ついたところから兄妹みたいに遊び回っていた。

そう。…小さい頃はね。

ただ成長して、10歳を越えたあたりからなんとなく疎遠になった。

一度だけ、俺の友人がふざけて『コイツお前のこと好きなんだぜ』と言っても、彼女は『ふうん…』と呟いてそれっきりだった。

それから俺たちは村を出て、一切会うこともなく日々を過ごした。

それからだった。夢の中に彼女が出始めたのは。

夢の中で俺は色んな場面に遭遇した。実は彼女も俺のことを好きでいてくれて、それを暴露される夢。かと思えば、彼女の結婚が決まって惜しみ無い拍手を送る夢。

そうして何度も彼女の夢を見る日々を過ごしているうちに、俺はちょっと気づいた。

…俺は…。

(あいつのことが好きだったんだ…)

気がつくと俺は、彼女に手紙を書いていた。

『今度の村祭りするとき、一緒に里帰りしないか？』

返事は“もしかしたら返事は来ないかもしれない”と思っていた頃に届いた。

内容はOKとのことだった。

そして村祭り。俺は彼女と何年かぶりに再会した。

数年ぶりに会った彼女は、俺が思っていたよりもずっと大人びていて…綺麗になっていた。

祭りの夜。村人が仮面をかぶって焚き火の周りを愉快に踊っている。がやがやと賑わうその中で、楽しそうに笑っている彼女に俺はそつと告白した。

「結婚してくれ」

彼女は、心底驚いたといった風情で俺を見上げてきた。

「返事は祭りの後でいいから」

そして、俺は彼女から離れていった。

十々十

(…どうしよう…)

今日、私は求婚された。そのこと自体は何の問題もない。

問題は私も彼を好きだということだ。ずっと一緒にいたいと思ってしまった。

(…どうしよう…彼が不幸になるようなことはしたくない…)

私は天界の住人。神話に出てくる神々のひとり。

神と人との婚姻は禁忌。交わしてしまえば神は永久にも等しい命を、人は己の血を未来へ繋ぐことを奪われてしまう。

人は己の血を未来へ繋ぐため、存在していると聞いた。それを奪われ、てしまうということは、すなわち存在理由がなくなるということだ。

…だから、駄目…。

きつと、彼は後悔する。私の命なんてどうでもいいけど、それだけは絶対に駄目だ。

全部を話して、消えよう。

彼の前から。

彼から私の記憶を消して…。

「返事、聞かせてくれるかな？」

彼が来た。私のところに。

「…あのね…」

私は彼に全て話した。

私の身の上、天界のこと、神と人との婚姻について。全部。

「…ふうん」

彼は驚くでもなく、何でもないことのように頷いた。

「だから、なんだってえの？」

「お別れだよ…」

私は泣きそうになりながら、俯いて言葉を紡いだ。

「俺はお前と一緒にいられたら、それでいいのに」

彼は私を抱き締めた。とても暖かい。

私は結末を知っているから泣きたくなかった。優しくしないで。

「もう、遅いよ…」

私は彼から離れた。今はこの距離が永遠のようだ。

顔を上げて、うまく笑顔になっているか分からないけど笑った。

「ねえ、最後にお願ひがあるの」

「最後だなんて言っなッ！」

彼は、いやいやをする子供のように首を振った。

「…幸せになって…」

風が吹いて、私は地上を離れる。

彼の記憶から私の記憶を消して。

…これでお別れ…。

また、夢を見た。

少し離れたところで、今にも泣きそうな顔で、一生懸命笑っている。

俺は彼女の名前も知らない。けれど、とても愛しい。

「…幸せになって…」

そんな顔して、そんなこと言つなよ…！

抱き締めようとして伸ばした手が届く前に、風が吹いて彼女が消える。

いつもここで目が覚める。

君は誰なんだ？

なんで、そんな哀しい顔をするんだ？

返事が返ってくるはずもないのに、夢の中の彼女に訊く。

そうやって過ごした。

数十年間。

十
十
十

彼が死んだ。

私は久しぶりに地上に降りて、彼の隣に立った。

冷たくなった手を握りながら。

「ねえ、幸せだった？」

彼は答えない。

私は泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207k/>

夢で逢いましょう

2010年10月21日22時01分発行